

## 4. 黒保根地域の民俗芸能に見る歴史的風致

本市の北東部に位置する黒保根地域は、風光明媚な山村地域であり、その中の上田沢、下田沢では、郷土の芸能である「涌丸獅子舞」と「前田原獅子舞」が、それぞれの集落に古くから伝わる。

涌丸獅子舞は江戸時代の安永年間（1772～1780）、前田原獅子舞も江戸時代中期頃にそ

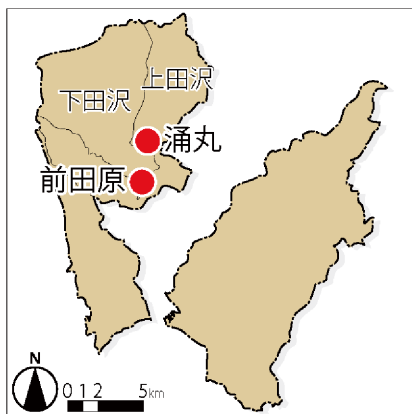
れぞれ始まったとされている。いずれの獅子舞も、かつては、「おくんち」と言って毎年9月9日、19日、29日を三九日とし、そのうち一日を秋季例祭と定め、五穀豊穡、無病息災を祈り奉納されていた。一時休止した時期がありながらも、現在は集落の住民達によって大切に受け継がれている。

	建物と町並み	営み
黒保根地域の民俗芸能に見る歴史的風致	①黒保根地域の歴史的建物と町並み ○上田沢地区の環境 ○下田沢地区の環境	②涌丸獅子舞「ささら舞」 ③前田原獅子舞

黒保根地域の民俗芸能に見る歴史的風致の体系図

### ① 黒保根地域の歴史的建物と町並み

黒保根地域は、赤城山東麓の山間傾斜地に集落が広がり、南部には渡良瀬川が流れる。古くから林業や農業で栄えた地域であり、様々な歴史的環境が広がっている。



黒保根町上田沢・下田沢の位置

#### ア. 上田沢地区の環境

黒保根地域の北東部に位置する上田沢は、中央に田沢川が流れ、西部に栗生山、その麓に栗生神社、南部に医光寺が建立されている。

旧上田沢村は古くから田沢を下組、涌丸を上組と通俗的に区分されていた。

#### a) 涌丸山医光寺

上組に建立されている涌丸山医光寺は、小黒川を見下ろした高台に広大な境内を構え、その歴史は古く、寺縁起によれば弘法大師が弘仁11年（820）開創したと伝えられている。境内には、本堂と薬師堂、赤城神社等を配置している。現在の本堂は、棟札によれば、延享4年（1747）の建築で、瓦葺き寄棟造平入りで大規模な伽藍を誇



医光寺

る。堂内には、永禄元年（1558）<sup>こ</sup>鑄造の虚空蔵菩薩像（<sup>くうぞう ぼさつぞう</sup>県指定重要文化財）や、栗生神社と同じく関口文治郎によるものと思われる、中国二十四孝<sup>にじゅうしこう</sup>を題材とした厚肉透かし彫りの彫刻欄間（市指定重要文化財）が施され異彩を放っている。



厚肉透かし彫りの彫刻欄間

#### b) 八坂神社

八坂神社は、鳥居と石祠で構成された神社であり、石祠周辺に平地が広がる。この地における八坂神社の起源は不明である。境内の中央に建つ人の目線の高さほどの石祠は、昭和36年（1961）に氏子たちが建立したものであるが、古くから天王宮とし



八坂神社石宮



八坂神社石祠

てこの地に鎮座されていた。通りに面して建つ鳥居は、刻銘から天保2年（1831）の建立とされる。境内にはその他にも多くの小さな石祠が建ち並び、中には「寛永四年」（1627）の銘のある愛宕宮なども存在している。

#### c) 赤城神社

赤城神社は、医光寺境内の右手の石段を登りきった所に鎮座しており、医光寺本堂と薬師堂の裏手の高台に位置する。覆屋に納められた社殿は、二間社造りで、三方の壁面に精巧な彫刻が施された風格のある建造物である。地元の彫刻師関口文治郎の弟子たちによるものと考えられている。神社の由緒は不明であるが、建造年代は棟札から文化6年（1809）とされる。前に建つ鳥居は、文化2年（1805）のものである。ここで秋の例祭にあわせて獅子舞が奉納される。



赤城神社

d) 上田沢地区のその他の建物と環境

沢入集落は、宝暦から文化年間に活躍した彫物師せきぐちぶんじろう関口文治郎の出身地で、沢入川沿いに形成されている小さな集落では、今でも文治郎を祖とする関口家が生活している。沢入集落は、古くから馬や人が行きかう交通の要衝でもあったため、馬頭観音が沢入観音堂に祭られている。観音堂には文治郎が寄進した半鐘も安置されるとともに、境内には文治郎の墓もある。近くには身を清めたとされる不動の滝も残されている。

また、下組を入口にして、栗生山の中腹の山深い細く急な参道を登り詰めた所には、栗生神社が鎮座する。境内には、社殿を正面に、左手に神楽殿、右手横に県の指定天然記念物である大スギ、その右手に太郎神社が鎮座する。草創は慶雲年間（704～708）と伝えられ、新田義貞にったよしさだの家臣で当時勇猛の名を馳せた栗生左衛門頼方くりゅうざえもんよりかたを祭り、武運の神として信仰されている。県指定重要文化財である本殿は、寛政2年（1790）の建立で、柱、壁面、脇障子などほぼ全面に関口文治郎による透かし彫りや高肉彫りなどの華麗な彫刻で埋め尽くされている。大木がそびえ自然豊かで静寂な境内に荘厳な雰囲気醸し出している。



馬頭観音



文治郎寄進の半鐘



栗生神社本殿

## イ. 下田沢地区の環境

下田沢は、上田沢の西側に接し、地区の西端には赤城山の最高峰である黒檜山くろびがそびえる。中央には、小黒川おぐろや鳥居川が流れ、渡良瀬川に流れ込む。

## a) 十二山神社

十二山神社は、地元では「じゅうにさま（十二様）」と言い、山の神様として信仰が厚い。本殿は一間社流れ造りで、幕末頃に建立されたと考えられるが、詳細は不明である。柏山地区かしやまにある赤城神社の末社も祭られ、赤城神社とも呼ばれている。本殿は近年まで、明治中期に建てられた覆屋がかかっていたが、現在は建て替えられ、真新しい覆屋の中に本殿が納められている。本殿の裏手には「文政二年」（1819）の銘がある天王宮、「弘化五年」（1848）の銘のある天満宮の石祠などが建立されている。



十二山神社



江戸時代後期の銘のある石宮

## b) 下田沢地区のその他の建物と環境

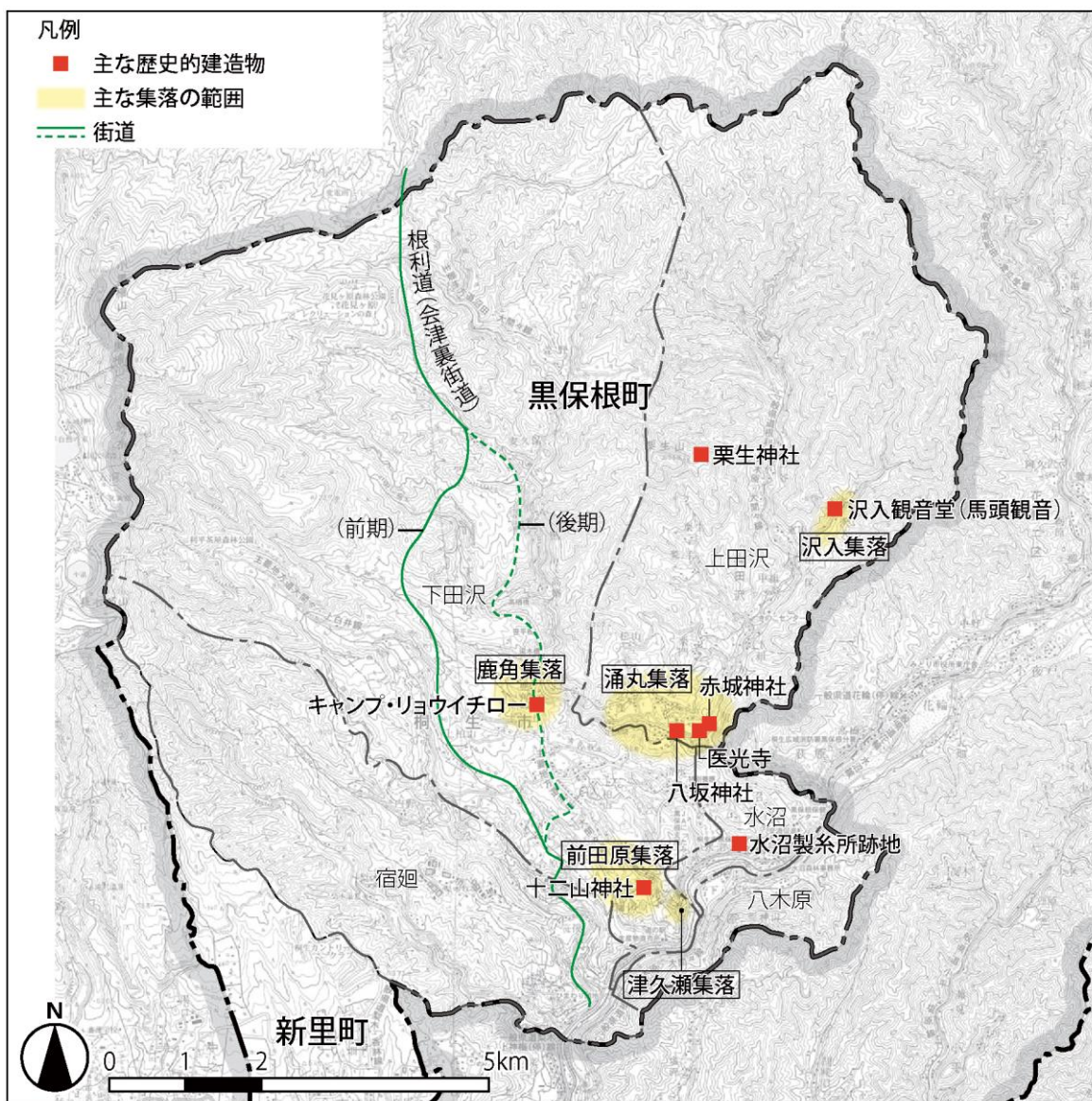
下田沢の中央を南北に走る根利道と呼ばれる会津裏街道は、繭や生糸の輸送路であったため、沿道に開かれた鹿角集落かづのには、重厚な趣を持った養蚕農家をしのばせる集落が広がる。生糸の直輸出を行った先駆者で、水沼製糸所を設立した星野長太郎ほしの ちやう たらうの弟でもある新井領一郎あらいりやういちろう、自由民権運動に奔走した熱血代議士である新井毫あらいごうもこの地の出身である。旧新井家跡地には、土蔵が残り、領一郎が築いた日米の絆を今につなぐ交流拠点として、孫の松方種子まつかたたねこが創設した西町インターナショナルスクールの分校キャンプ・リョウイチローが設置され、西町の生徒と地元小中学生との交流が続いている。

また、津久瀬集落つくぜにも、大型の養蚕農家の多い集落が広がる。高低差のある地形を活かした集落で、背後の深い森に立つ大杉や集落脇を流れる河川や石垣など、歴史の趣を感じさせる環境が広がっている。



星野長太郎

新井毫  
(国会議員当時)西町インターナショナルスクール  
との交流の様子（稲刈り）



黒保根地域の歴史的環境

② 涌丸獅子舞「ささら舞」

上田沢涌丸地区に伝わる伝統の獅子舞である涌丸獅子舞が始められたのは『黒保根村誌』によれば、江戸時代の安永年間（1772～1780）とされる。この地では「ささら舞」とも称され、竹の先を細かく割った竹をたばねた和楽器「ささら」から来た名称と解釈されるが、実際の舞ではささらは使用していない。記録によると、明治11年（1878）、舞で使用される太鼓の皮の張替えが行われており、古くから地区住民に親しまれ、戦前までは地区をあげての最大行事としてにぎわいを見せていたという。戦時の混乱により、一時休止の状態にあったが、舞の必需品である獅子頭

や太鼓は地元住民により定期的に管理されていたこともあり、再開を望む地元の強い熱意と、古老たちの記憶の中から昭和40年（1965）頃から日々練習を重ね、昭和46年（1971）、保存会の結成とともに公開できるまでになった。現在の保存会は、地区内の全



ささら舞

戸が会員となり、その中で役員が中心となり練習の指導や当日の運営等を行っている。



昭和53年頃の涌丸獅子舞

舞手は、昔から農家の長男であることとされていたが、近年は、地区内の子どもの数も少ないなかで、長男とは限らず地区をあげて昔からの伝統を受け継いでいる。お囃子として、笛や小太鼓、大太鼓で構成され、後継者の育成は欠かせない。舞の途中に、唄い言葉が入り、お囃子と舞との絶妙なタイミングも日頃からの練習が必要である。保存会では、農閑期を中心に毎月第3土曜日に練習会を実施している。寒さのなかの練習でも、汗がにじむほどの激しく厳しい練習が行われている。祭礼が近づくと、本番さながらの全体練習にいそしむ。

現在では毎年10月上旬の日曜日に行われることが多く、祭り当日は、涌丸集会所を拠点に、地区内の八坂神社と赤城神社へと歩きながら巡りそれぞれ一庭奉納し、最後に医光寺境内において一般に向けて披露する。

かつては、氏子でもあるため、栗生山中腹



本番さながらの練習の様子

に鎮座する栗生神社まで練り歩いたという。それぞれの衣裳を身にまとった状態で、太鼓を担ぎ、整備もままならない山道を登っていたことを考えると、驚嘆に値する。

集会所で式典を終え、身支度を整えた後、集会所の庭で、一庭舞う「宿払い」を行う。以前は、この祭典を催すにあたり、涌丸地区の5集落から選出された各若衆頭が輪番で祭りを取り仕切るとともに、舞手の練習のために宿を提供していたことから、出発前に敬意を表するためにそこで一庭舞ったことに由来する。

演じ終わると幣束を持った地区の代表を先頭に、大幟、そして3匹の獅子、笛、太鼓と列をなし集落へと練りだす。太鼓や笛の音を鳴らし、のどかな集落に響き渡らせながら、一行は八坂神社、赤城神社へ向かう。途



宿払い



涌丸獅子舞ルート

中、田畑の広がる自然豊かな農村風景に、練り歩き一行が趣きを添え、郷愁が漂う。それぞれの境内では、地区の祭り番によって、お出迎えとおもてなしが行われるなか、奉納舞をささげる。

午後には、赤城神社から医光寺本堂前に場所を移す。本堂では祭り番のおもてなしがなされ、多くの観衆がむしろの敷かれた周辺を取り囲む。大きな本堂を前に、この日の集大成とも言うべく、3匹の獅子が大きく勇壮に舞う姿が見られる。

この舞は、大頭<sup>だいかしら</sup>、牡獅子<sup>おじし</sup>、雌獅子<sup>めじし</sup>の3匹の獅子頭による動きの激しい勇壮な舞で、笛や太鼓の音に合わせ、大きく分けて「切り（節）のない舞」、「切りのある舞」、そして医光寺本堂前での舞納めには「幣束取りの舞」が演じられる。立てかけられた幣束が一番強いとされる大頭がなんとか取り上げ、邪気<sup>はら</sup>を祓うというものである。舞終了後、その幣束は細かくちぎられ、観客に配られる。疫病退散のご利益があるという。

ある時は静かに、ある時は激しく、狩猟時代を連想した動物が捕らわれ、射られていたりする動作や、咬んだり、驚いたり、愛情の表現などが含まれていると言われ、大昔の風俗が取り入れられている。獅子の表情が変化するとも言われ、昔から変わらぬ素朴で厳粛な舞が見られる。



練り歩きの様子



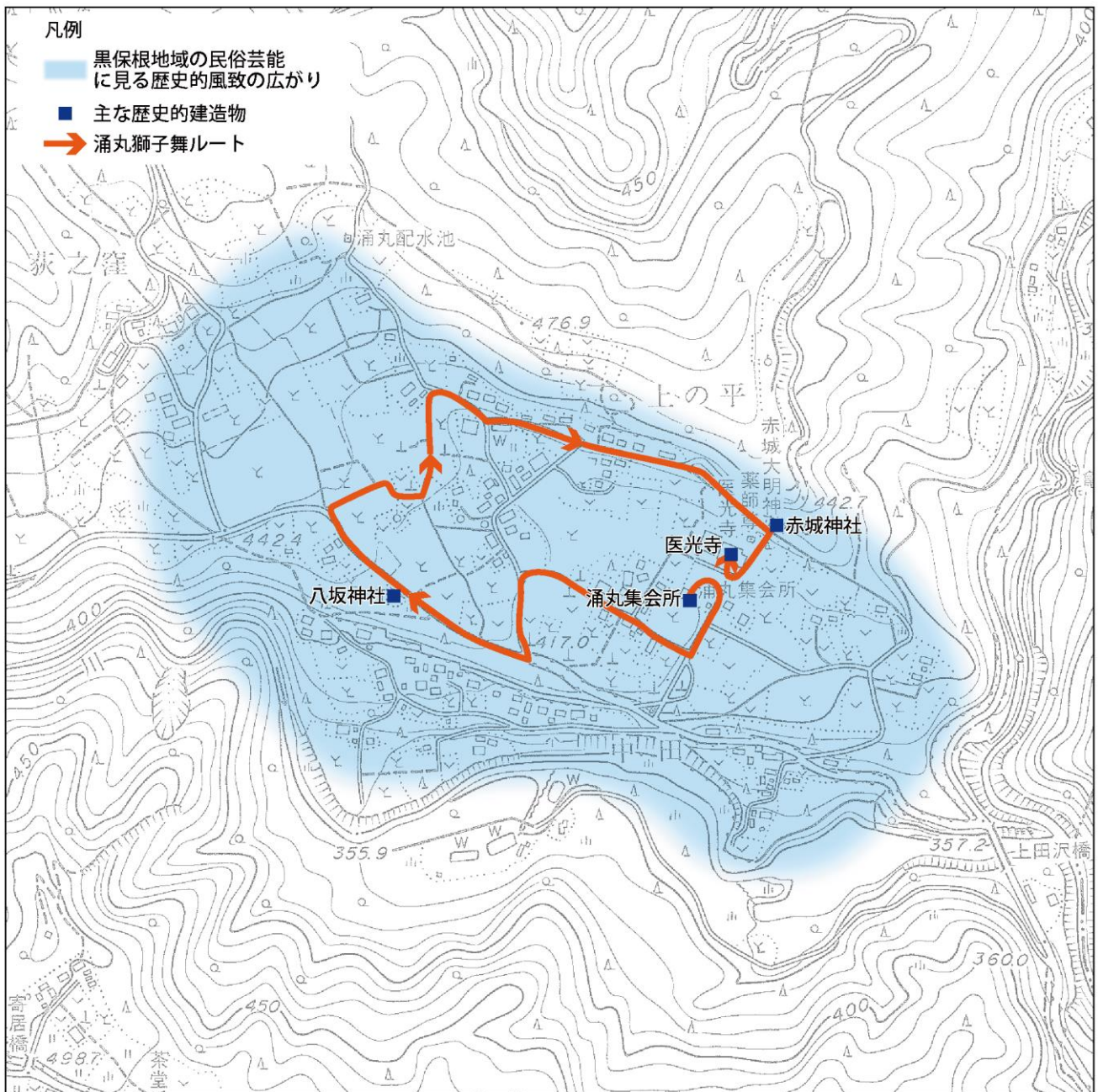
医光寺での舞



八坂神社での舞



勇壮に舞う3匹



涌丸周辺の歴史的風致の広がり



③ 前田原獅子舞

前田原獅子舞は、下田沢前田原地区の氏神である十二山神社の秋季例祭であり、毎年10月の第1日曜日に、五穀豊穡、家内安全、集落の安全を願い奉納されている。

前田原獅子舞の始まりは、「江戸の中期頃、愛知県岡崎から導入」と『黒保根村誌』にある。資料は焼失により、詳細は不明であるが、舞の種類の中に「おかざき」とあることから関連性がうかがえる。戦前は、集落上げての最大行事としてにぎわっていたという。戦後一時休止したこともあったが、昭和40年（1965）頃から各地で相次ぐ伝統芸能の復活

に刺激を受け、古老が幼少期に教わった舞を、口承で文字とカセットテープに起こしたことで、子ども達の練習も活発となり、多くの舞や笛がそのままの内容で継承され、昭和49年（1974）には保存会により再開された。

祭礼当日、集会所に集まった関係者は、ここで身支度を整える。舞子は、古くからの慣わしで7歳前後の小学生が中心となる。唄い言葉に「七つの子が今年初めて獅子を振る。足らぬところはごめんなされ」とあり、昔から、子どもが舞う「子ども遊びの舞」であった。獅子頭は、俗に竜頭りゅうずと呼ばれ、牡獅子おじし、雌獅子めじし、法眼ほうがんの三獅子があり、それぞれ眼、



前田原獅子舞



昭和22年頃の獅子舞の様子



昭和50年の十二山神社境内での獅子舞の様子

舞の組み立て

(一)	露払い
(二)	前奏曲
(三)	舞始め
(四)	おかざき
(五)	ねむり
(六)	一人演舞
(七)	はねっこ
(八)	こびき
(九)	遊べ友だち
(十)	終わり舞
(十一)	後奏曲



獅子頭（竜頭）  
左から法眼・雌獅子・牡獅子

獅子頭の特徴

牡獅子	角・耳・牙がある。
雌獅子	歯が黒く小さい。角・牙がない。
法眼	角・牙がある。耳はない。

鼻、口、歯並びなど特徴がある。大きな羽は、近年まで地区内で飼われていたニワトリの一品種である<sup>とうまる</sup>鶉の黒い羽を使用している。黒い竜頭は、戦前から使用されているもので年季が入っているが、くるみの油で拭き上げられ艶を放つ。

衣装を着込んだ子どもたちは、獅子の身体を表す緑の布と赤い布をまとい、竜頭をかぶり、<sup>こしつみ</sup>腰鼓をひもで固定し、両手にはバチ棒を持つ。笛吹きは、ボタンの花笠をかぶる。

約100メートル西に位置する十二山神社までの移動は、かつて、青い笹を持った庭はきが先導し道中を<sup>はら</sup>祓い清め、オカメの面をかぶった道化が興を添えながら進んだ。これが「露払い」という舞の一種になっている。

舞は三獅子、太鼓一人と笛複数人で構成され、「露払い」を含めると11種類が今日に継承されている。笛の音に合わせ、三匹の獅子が、子どもながらも激しい動きと、優雅な動きを繰り返しながら、テンポ良く踊る。舞子は、足踏みや回転しながら、腰鼓を巧みに鳴らし、堂々と舞い上げる。途中には、笛吹きによる唄い言葉、舞子による唄い言葉をはさみ、三人舞が奉納される。舞い終わると、観衆からは惜しみない拍手が送られる。地区で育て上げ、地区の一体感を感じる瞬間である。

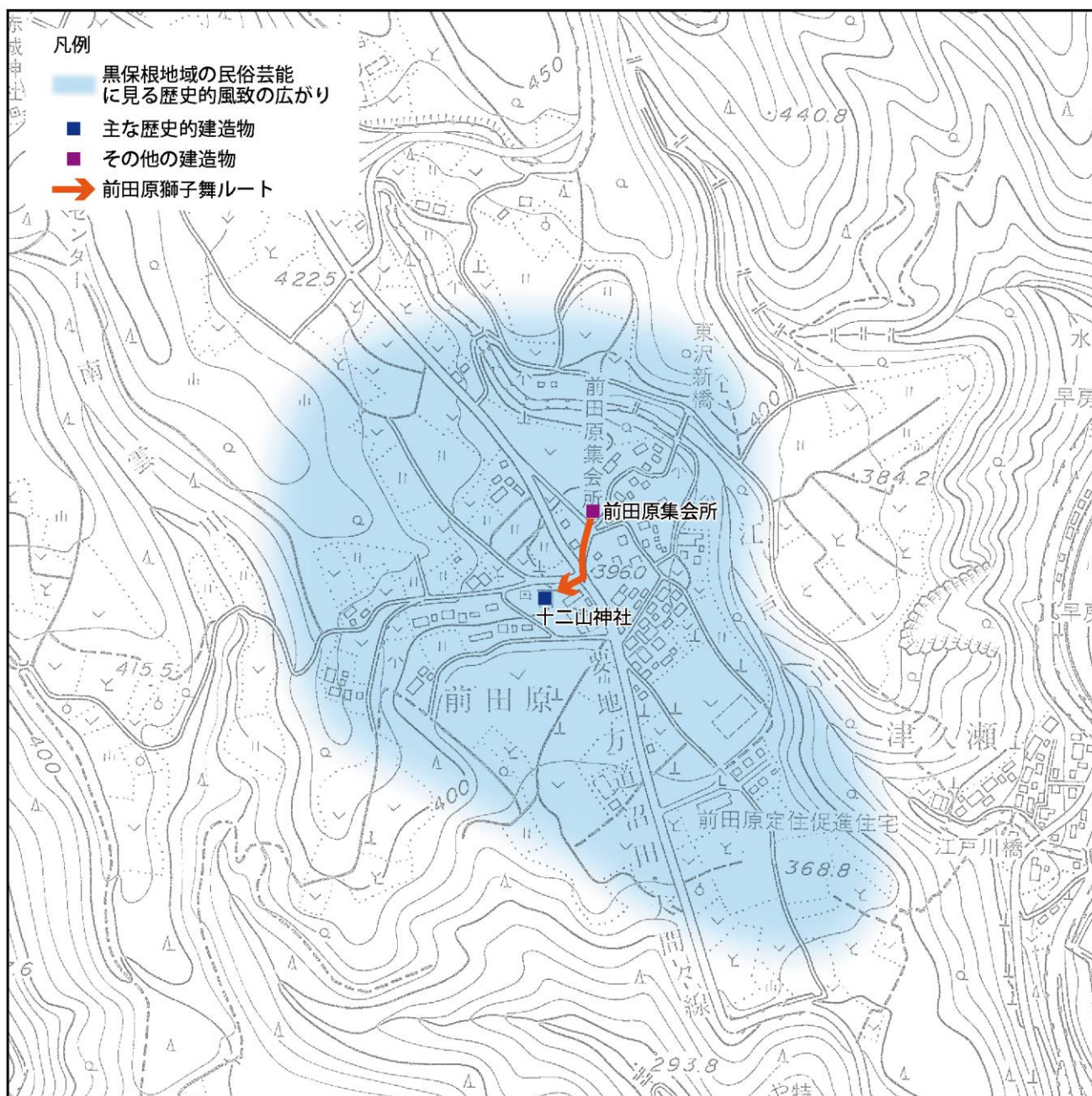
往年には、<sup>かしま</sup>柏山の赤城神社、地区長宅などでも演じ、一日中舞っていたが、現在では、十二山神社だけとなっている。



腰鼓を叩きながら神社の鳥居をくぐる



舞の様子



前田原周辺の歴史的風致の広がり

### □ 山村集落に響き渡る伝統の獅子舞

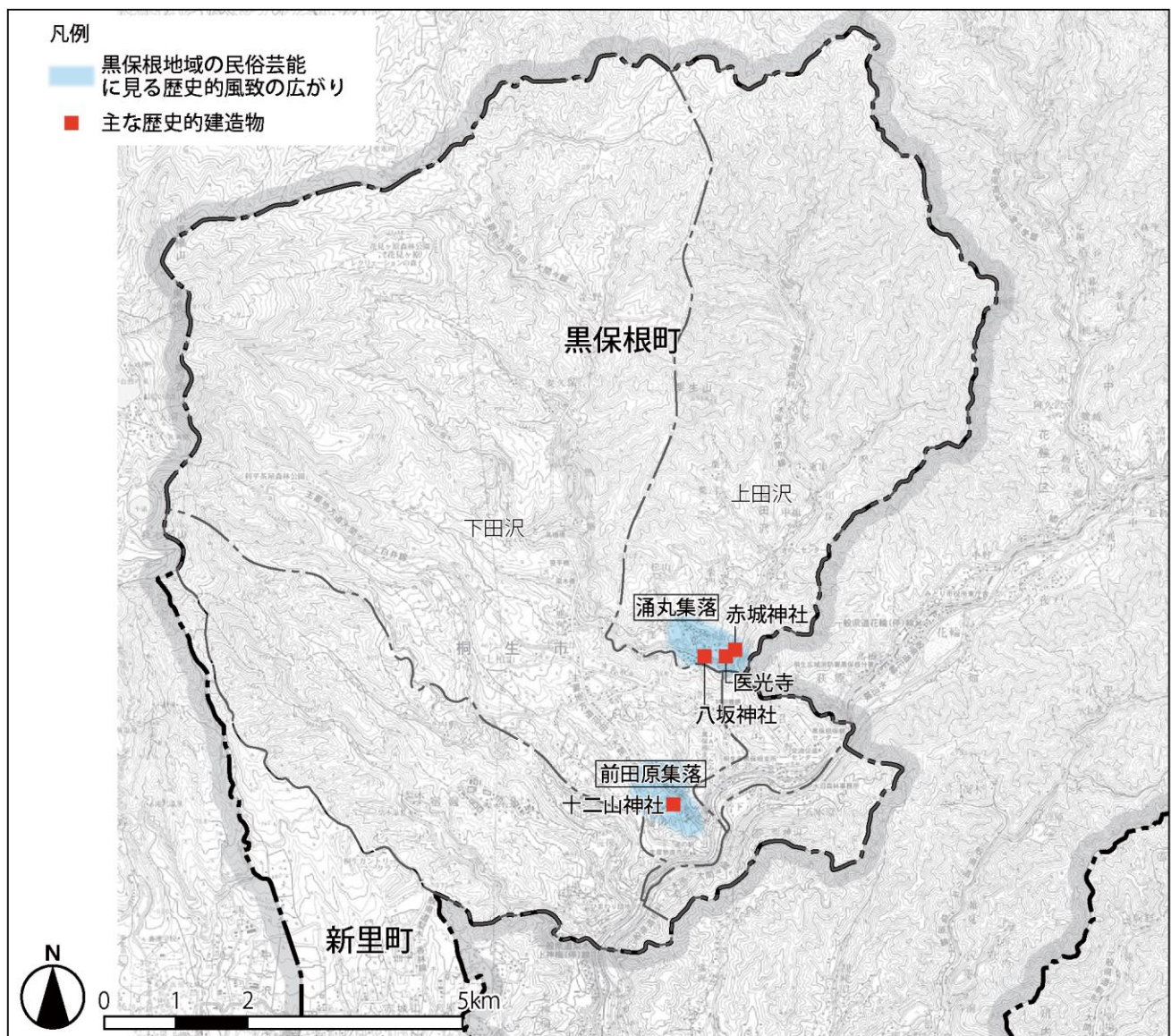
黒保根地域は、林業や農業で栄えた歴史を感じさせる風光明媚な山村集落であり、涌丸・前田原の2地区では、郷土の民俗芸能である獅子舞がそれぞれ古くから継承されている。

涌丸獅子舞は、上田沢涌丸地区を舞台に開催され、3匹の獅子と笛や太鼓などの一行が、八坂神社や赤城神社などを巡りながら練り歩き、医光寺へと向かう。地区の住民達によって結成された保存会によって受け継がれており、これらの社寺と田畑の広がる郷愁漂う農村風景を舞台として、リズム感のある太鼓に、山村の谷間に流れるように笛の音が響

き渡り、勇壮に獅子が舞う様子が見られる。

前田原獅子舞は、下田沢前田原地区の住民達によって受け継がれ、前田原集会所や幕末頃に建立された十二山神社を中心として行われている。秋風のそよぐ神社境内に、笛と太鼓が奏でる音が響き渡り、素朴でいて、子ども達の元気さが伝わるふるさとの獅子舞である。

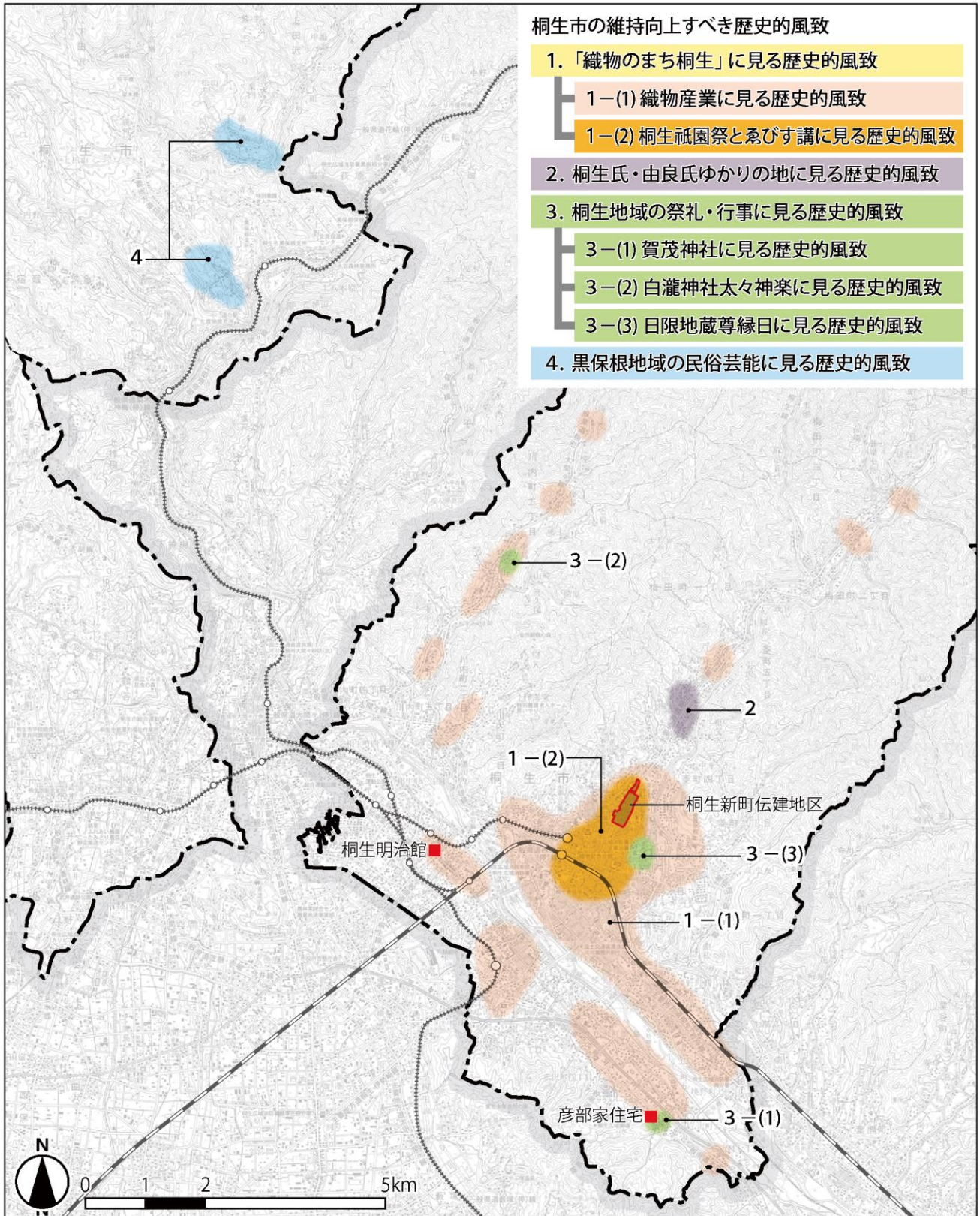
いずれの獅子舞も、自然豊かな集落に建つ歴史的な社寺を舞台として上演され、趣ある風情を醸し出す良好な歴史的風致を形成している。



黒保根地域の民俗芸能に見る歴史的風致の広がり

## 桐生市の維持向上すべき歴史的風致のまとめ

以上のように、本市の維持向上すべき歴史的風致は『「織物のまち桐生」に見る歴史的風致』『桐生氏・由良氏ゆかりの地に見る歴史的風致』『桐生地域の祭礼・行事に見る歴史的風致』『黒保根地域の民俗芸能に見る歴史的風致』から構成されており、歴史的風致の広がり形成されている範囲は以下の図のとおりである。



桐生市の維持向上すべき歴史的風致の広がり